

紫波町比爪館遺跡出土の鉄製馬具

村田 淳

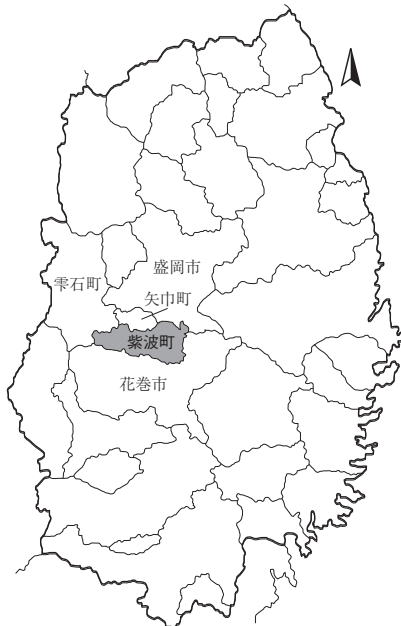
紫波町比爪館遺跡の第12・16次調査で出土した鉄製馬具（轡）について、これまで個別の実測図が無かったことから実測図作成と外観写真撮影を行い、観察結果を掲載した。形態としては鏡板の平面形が逆ハート形となる「杏葉轡」であり、類例との比較から古代末～中世初頭（12世紀後葉～13世紀初頭）に製作されたものであることがわかった。

はじめに

今回報告する鉄製馬具は、紫波町南日詰に所在する比爪館遺跡の第12・16次調査で出土したものである（以下、本資料とする）。本資料は、かわらけや陶磁器類等と共に集合写真で比爪館遺跡の12世紀代の居館に伴う遺物として紹介されることが多いが（岩手県立博物館2014ほか）、平成14年に刊行された調査報告書には個別の実測図及び写真が掲載されていない（紫波町教委2002）。また、本資料は保存処理が実施されており保管状態は良好であったが、出土した状態のまま処理が行われた為、集合写真では連結方法をはじめとする細部の観察が難しい状況であった。しかし、令和3年度に岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターの開館記念企画展「奥州藤原氏が観た東方浄瑠璃世界－赤沢七仏薬師－」において本資料を展示することとなり、担当者のご厚意で実見する機会を頂いた。また、その後資料の所蔵先である紫波町教育委員会からの許可を得て、実測図の作成及び外観写真撮影を行い、本報告で掲載する運びとなった。本稿では、比爪館遺跡における重要遺物の一つである本資料について、観察の結果と類例との比較について記載を行う。

1. 出土遺跡の概要（第1図）

比爪館遺跡は、岩手県中部の紫波郡紫波町南日詰字箱清水に所在し、北上川西岸の河岸段丘（花巻段丘相当面）上に立地する。遺跡範囲は東西約320m、南北約340mで、現況は宅地及び畑地である。紫波町教育委員会が主体となって令和3年度までに34次にわたる調査が実施されており、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている。ただし、主体となる時代は大きく2時期であり、一つは竪穴建物を主体とする9～10世紀代の集落で、時期不明を含むが70軒近い竪穴建物が検出され、施釉陶器（緑釉・灰釉）・石帯（巡方）・文字関連資料（墨書土器・硯）といった律令系の遺物が出土している。もう一つは大溝で区画され、内部に掘立柱建物・井戸を有する12世紀代の居館で、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』に記載されている「比爪館（ひづめのたち）」に比定され则认为られている。居館は東西約300m、南北約200mの範囲で、北・東・西辺は大溝で区画され南辺は五郎沼に面している。発掘調査が実施された地点は遺跡範囲北西側の赤石小学校敷地内に集中しており、発掘調査で全域の様相が判明しているわけではないが、規模の大きな四面庇柱建物をはじめとする掘立柱建物が20棟以上、その他にも塀・井戸等の遺構が検出され、遺構内からはかわらけや国産陶器（渥美窯・常滑窯産）が多量に出土している。また、微地形測量調査により南西部に約100m四方の規模を持つ池とその西端に島状の高まりが確認されており、平泉町無量光院跡のような阿弥陀堂浄土庭園が存在していた可能性が指摘されている（岩手県立博物館2016）。居館の成立年代については資料が乏しい為判然としないが、羽柴直人は先述の阿弥陀堂浄土庭園が存在する可能性があることから、平泉において同様の型式の庭



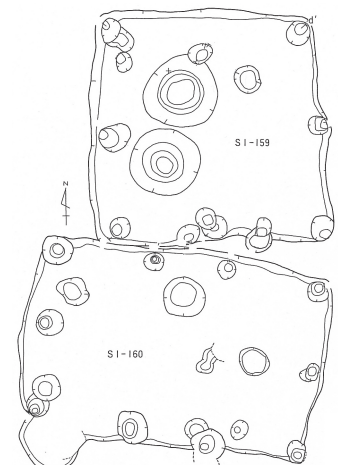
岩手県全図（縮尺不定）



遺跡位置図（1:50,000 日誌を改変）



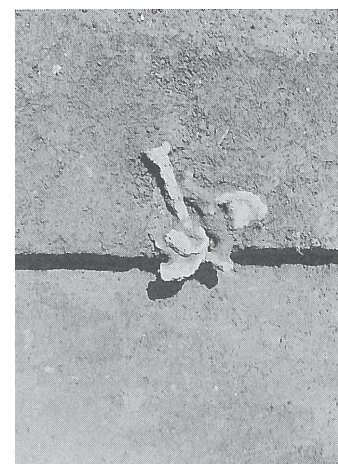
第12・16・18次調査区
遺構配置図（縮尺=1/600）



S1-160 平面図（縮尺 1/100）



比爪館遺跡全体図（縮尺 1/4,000）



馬具出土状況（縮尺不定）

第1図 比爪館遺跡の位置・出土遺構

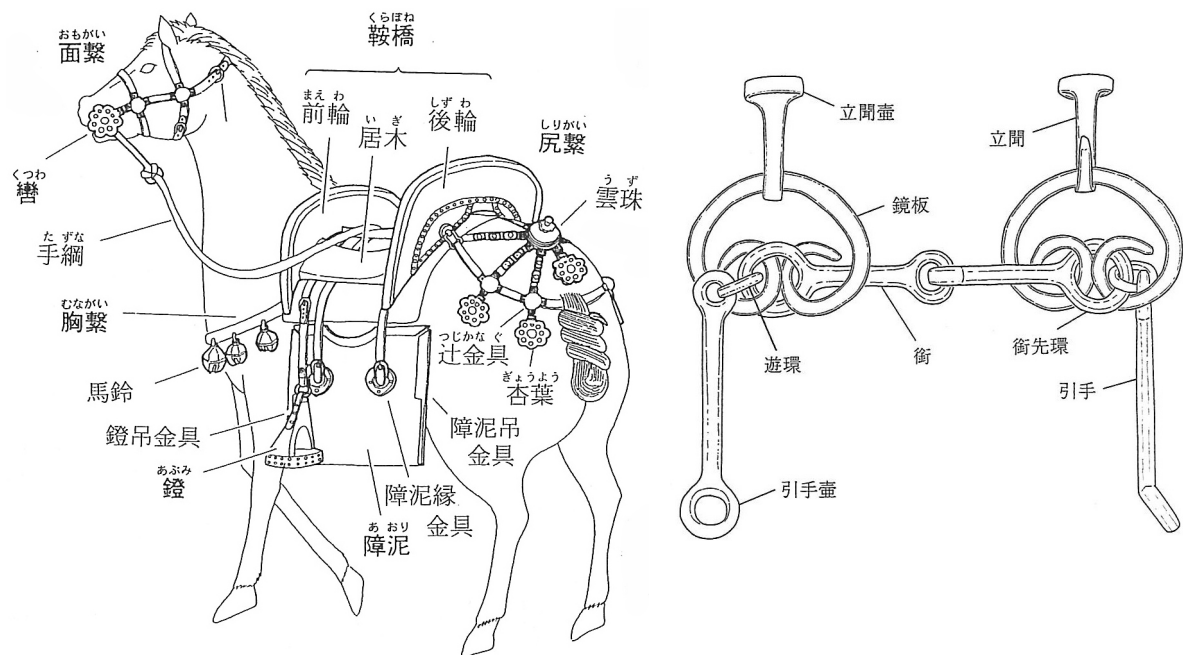
園を有する無量光院跡の造園年代を考慮して嘉応2（1170）年以降の造営と考えている（羽柴2022）。

鉄製馬具が出土した遺構は、遺跡範囲北西側に位置する第12次調査で検出し、第16次調査で精査を行ったSI-160竪穴建物である。平面形は東西に長い長方形で、上面規模は4.7×3.1mである。上面が大幅に削平されており、検出面からの深さは8～10cmである。南西コーナー部に半円状の張り出しを有するが、炉や貯蔵穴といった床面施設は検出されていない。出土遺物は馬具以外にかわらけの小片のみであり詳細な年代は不明であるが、庇付掘立柱建物の柱穴に床面を壊されている。報告書中に馬具の出土状況についての記載は無いが、出土状況の写真から堆積土観察用のベルト中の床面よりやや上位で出土したことがわかる（第1図右下）。

2. 資料の観察

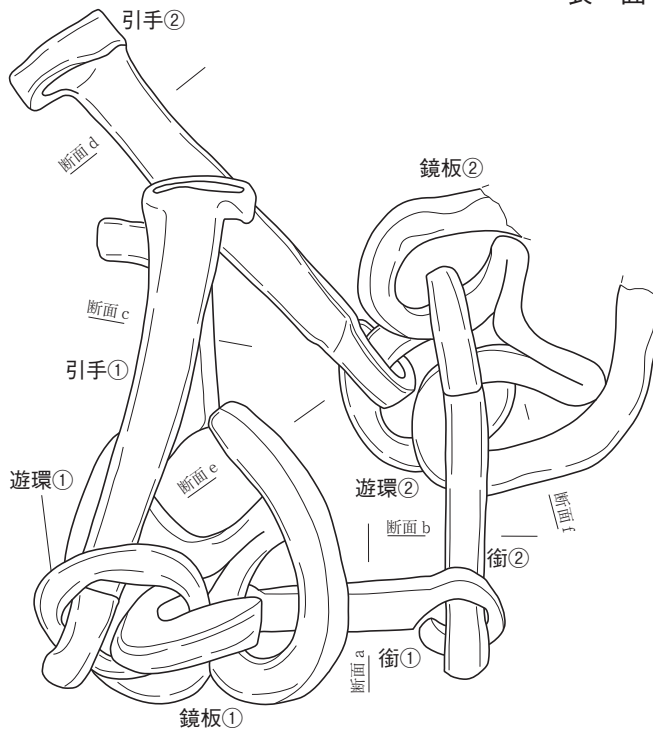
器種は轡で、銜・引手・鏡板・遊環で構成されている。鏡板の一部が欠損しているが、遺存状況は良好である。馬具は複数の部材の組み合わせからなり、機能面から大きく3つの部分に分けられるが、このうち轡は口に取り付けて手綱を繋いで馬を制御する為の道具である（第2図、註1）。前述の通り、本資料は既に保存処理作業が終了しており出土直後の状態ではないが、先述の岩手県立平泉世界文化遺産ガイダンスセンター開館記念企画展の際にX線透過写真撮影（以下、X線写真）が実施されている。撮影者である羽柴直人氏から画像提供をして頂いたことから、実測図作成の参考資料及び一部については掲載資料として使用した。以下では各部の形状や大きさについて記載するが、実測図はX線写真で得られた情報を加味して復元的に作成しており、合わせて掲載した外観写真とは異なる部分があることを先に断っておきたい（第3図、註2）。

銜は馬の口の中に入れて噛ませる道具である。本資料は鉄棒の両端を蕨手状に曲げた蕨手状銜で、同一形状のものを連結させる二連銜である。銜①は直線的な形状で、銜先環までの長さ10.4cm、棒状部中央部付近は幅・厚さ共に1.15cmで、断面形は正方形である。銜②は鏡板②に連結する銜先環が若干屈曲しているがほぼ直線的であり、端部までの長さ10.8cm、棒状部中央部付近は幅・厚さ共に1.0cmで、断面形は正方形である。銜①・②とも銜先環のほうが銜同士を連結する側（輪違）より大きいのが、両側とも先端部に向かって幅・厚さ共に薄くなり、断面形も扁平となる。

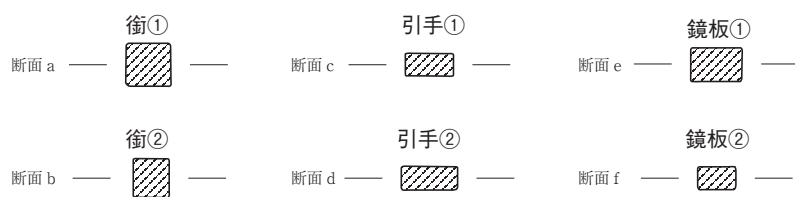
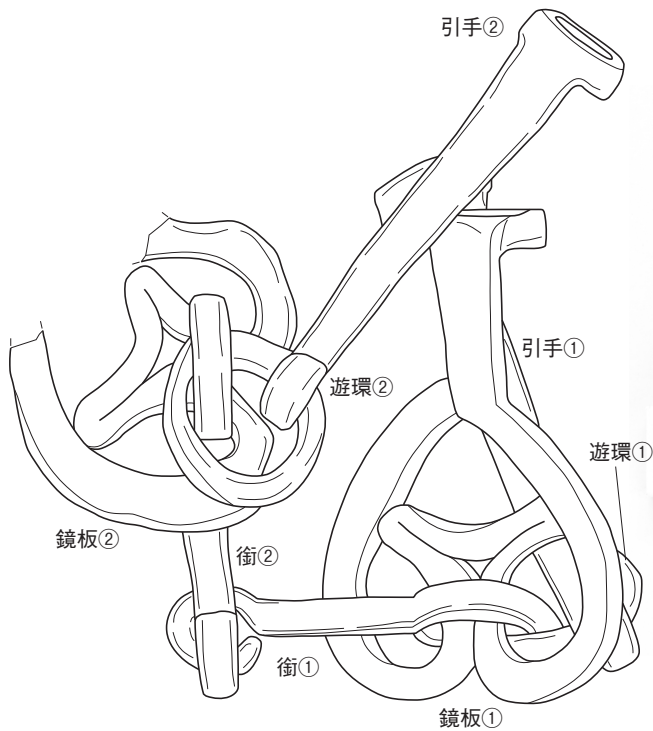


第2図 馬具・轡部分名称図

表 面



裏 面

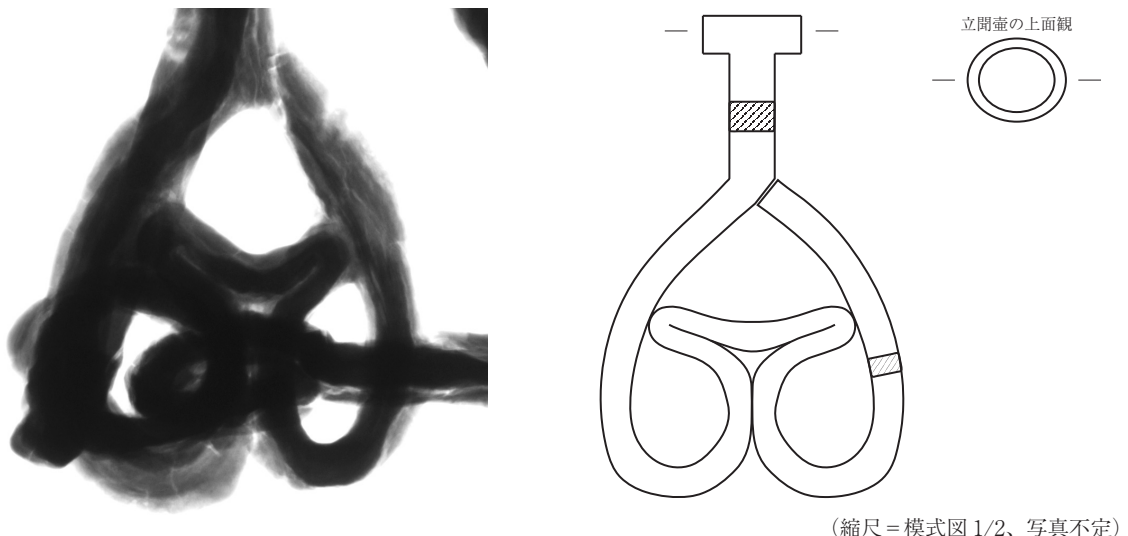


(縮尺 = 実測図 1/2、写真不定)

第2図 馬具実測図及び外観写真

引手は銜の先に取り付けられて手綱を連結する為の道具で、引手①・②とも捩じり無し一本柄引手である。引手①は屈曲の為若干丸みを持つが棒状部はほぼ直線的で、引手壺から反対側の環までの長さは14.0cmである。棒状部は引手壺に向かって幅広の平面形で、引手壺に近い部分は幅1.2cm、厚さ0.6cm、断面形は長方形である。しかし、反対の環に近い部分は幅が狭くなり、断面形は正方形に近くなる。引手壺は棒状部から直角に屈曲し、円形で内径は2.1cmである。引手壺と反対側の環は蕨手状であるが、銜と異なり引手壺に直交し、さらに引手壺の反対側に曲げられている。引手②は歪みが無く直線的な棒状部で、引手壺から反対側の環までの長さは13.3cmである。棒状部形状は引手①と同じであり、引手壺側の幅1.5cm、厚さ0.6cm、断面形は長方形であるが、反対側の環付近は断面形が正方形に近くなる。引手壺と反対側の環の形状も引手①と同じである。

鏡板は、銜の脱落を防ぎ面繫に連結する為の道具である。立聞と鏡で構成され、鏡板②は立聞が欠損しているが鏡板①は完形である。鏡板①は鏡の平面形が逆ハート形になるいわゆる「杏葉轡」と呼ばれる形態である。最初に外観観察を行った時点では、通有の杏葉轡と同じく二股に分かれた下端部が蕨手状に巻き上げられる型式で、蕨手状の部分が保存処理の際に本体部と一体化したものと考えていた（第3図外観写真参照）。しかし、実測の際にX線写真で鏡板の部分を観察したところ、蕨手状部分と本体部は離れており、1本の鉄棒を曲げることで立聞から鏡まで一連で作られていたことがわかった（第4図）。立聞と鏡を合わせた長さは13.0cm、最大幅は7.5cmである。続いて立聞と鏡の構造についてみていく。立聞は立聞壺が付き、棒状部分に対して直角に折れ曲がるL字形屈曲立聞である。立聞壺から下端部（鏡との屈曲部）までの長さは約5.0cm、中央部付近の幅1.5cm、厚さ0.9cmで、断面形は長方形である。立聞壺は若干変形しているが、楕円形と考えられ内径は2cm程度である。次に鏡であるが、先述の通り平面形は逆ハート形である。成形方法は、まず直線的に延びた立聞の下端部から外側に屈曲して中央～下端付近が膨らむように曲げ、下端部の中央から内側に向かって三叉状（あるいは「Y」字状）に曲げていく。三叉状の部分の下端から反対側と対称形になるように曲げていき、立聞の下端部に合わせて留めている。なお、立聞と鏡の端部が接合されていたかは外観からは判別しがたいが、X線写真ではその部分は薄く透過して見えることからわずかに空隙があったものと考えられる（第4図）。鏡板②は立聞を欠損しているが、X線写真の観察では鏡板①と同様の構造・大きさであったと考えられる。なお、鏡を成形する部分の鉄棒は立聞よりも細身であり、外周部分は幅1.0cm、厚さ0.65cm、三叉状の部分は幅0.7cm、厚さ0.6cmである。共に断面形は長方形であるが、三叉状の部分は保存処理の影響もあり現状は若干円形に近い。



第4図 鏡板①X線透過撮影写真・推定模式図

遊環(遊金)は、銜と引手を連結する為の道具である。遊環①・②とも平面形は円形で、外径は4.0～4.5cm、内径は2.5～3.0cmである。保存処理時の薬品含侵の影響による膨れが大きく、断面形及び断面の幅・厚さは計測できなかった。

最後に各部品の連結方法についてみていく(第6図9)。まず銜と鏡板であるが、銜先環が鏡板の三叉状の部分と連結され、さらに鏡板の外側の銜先環に遊環が連結される。次に引手であるが、銜や鏡板ではなく遊環とのみ連結されている。つまり、銜・鏡板と引手を遊環を介して繋ぐいわゆる橋金具連結法であったと考えられる(津野2012)。

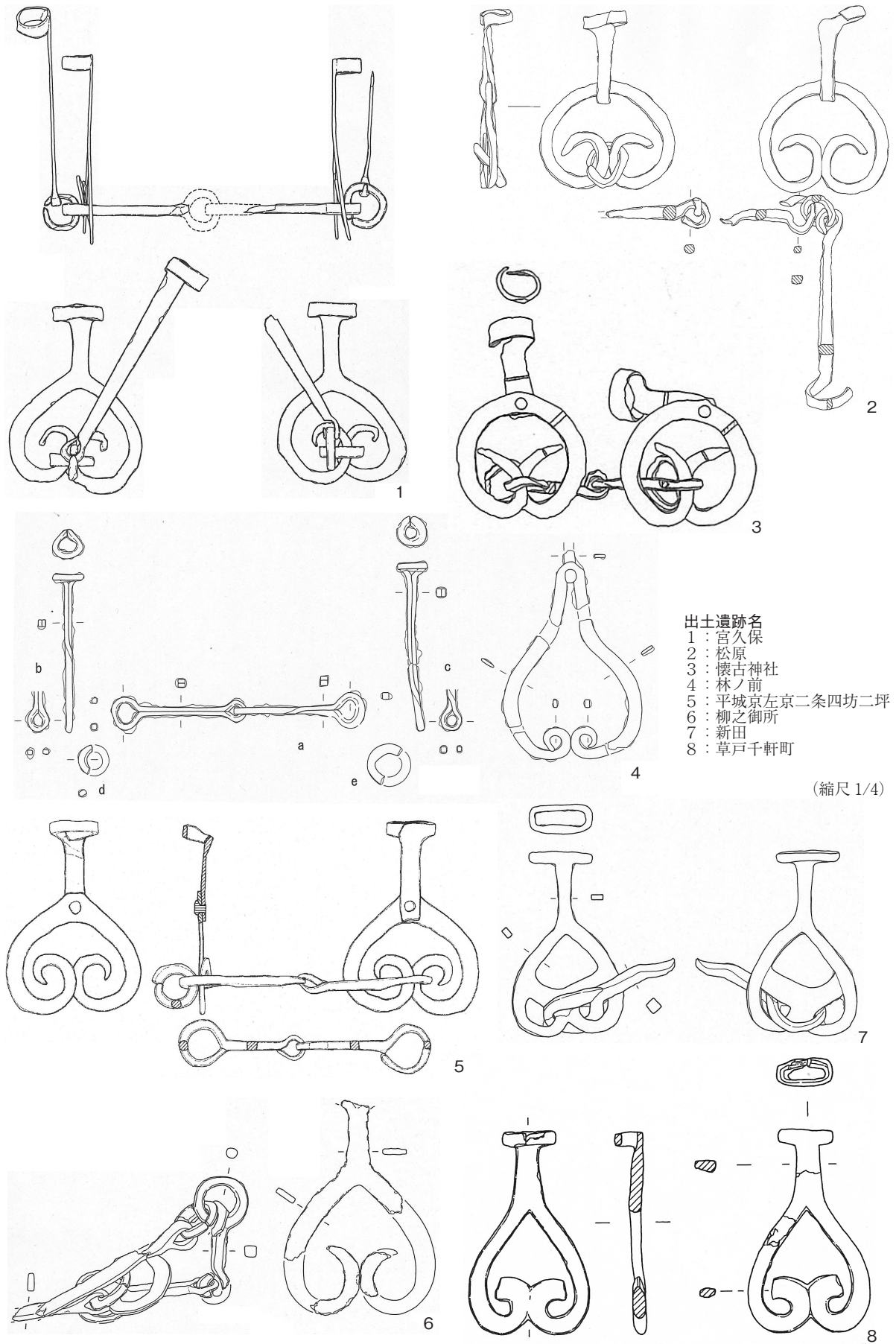
3. 類例との比較(第3図)

前節で記載した通り、本資料は鏡板が逆ハート形の杏葉轡であることが判明した。杏葉轡とは、馬の胸懸や尻懸に着ける杏葉の形に類似した鏡板を持つ轡を指し、平安時代になって出現する型式である。『伴大納言絵巻』(12世紀後半作か)や『平治物語絵巻』(13世紀後半作)、『後三年合戦絵巻』(14世紀中頃作)等の絵巻物に描かれていることが知られているが、伝世品として現存する平安時代の作例は無い(片山1990)。ただし、発掘調査では日本各地の遺跡で出土事例が確認されており、集成や編年についての検討が行われている(鈴木1999・滝瀬1994・津野2012等)。本節では、発掘出土資料から分類を行った鈴木一有の論考を中心として杏葉轡の分類と年代観についてみていき、本資料との比較を行っていきたい。

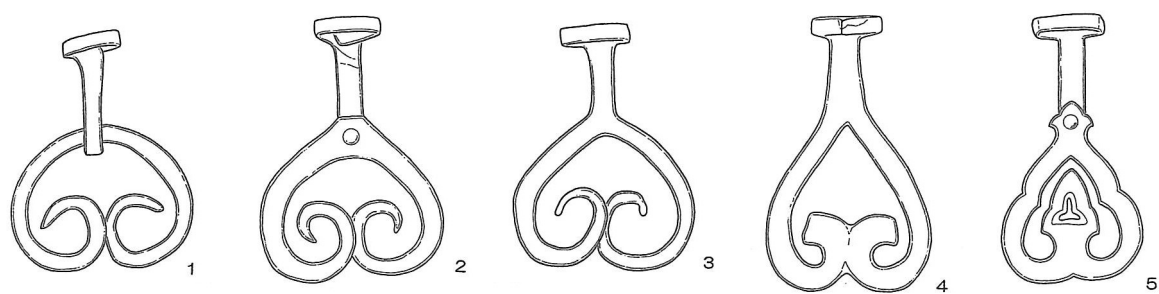
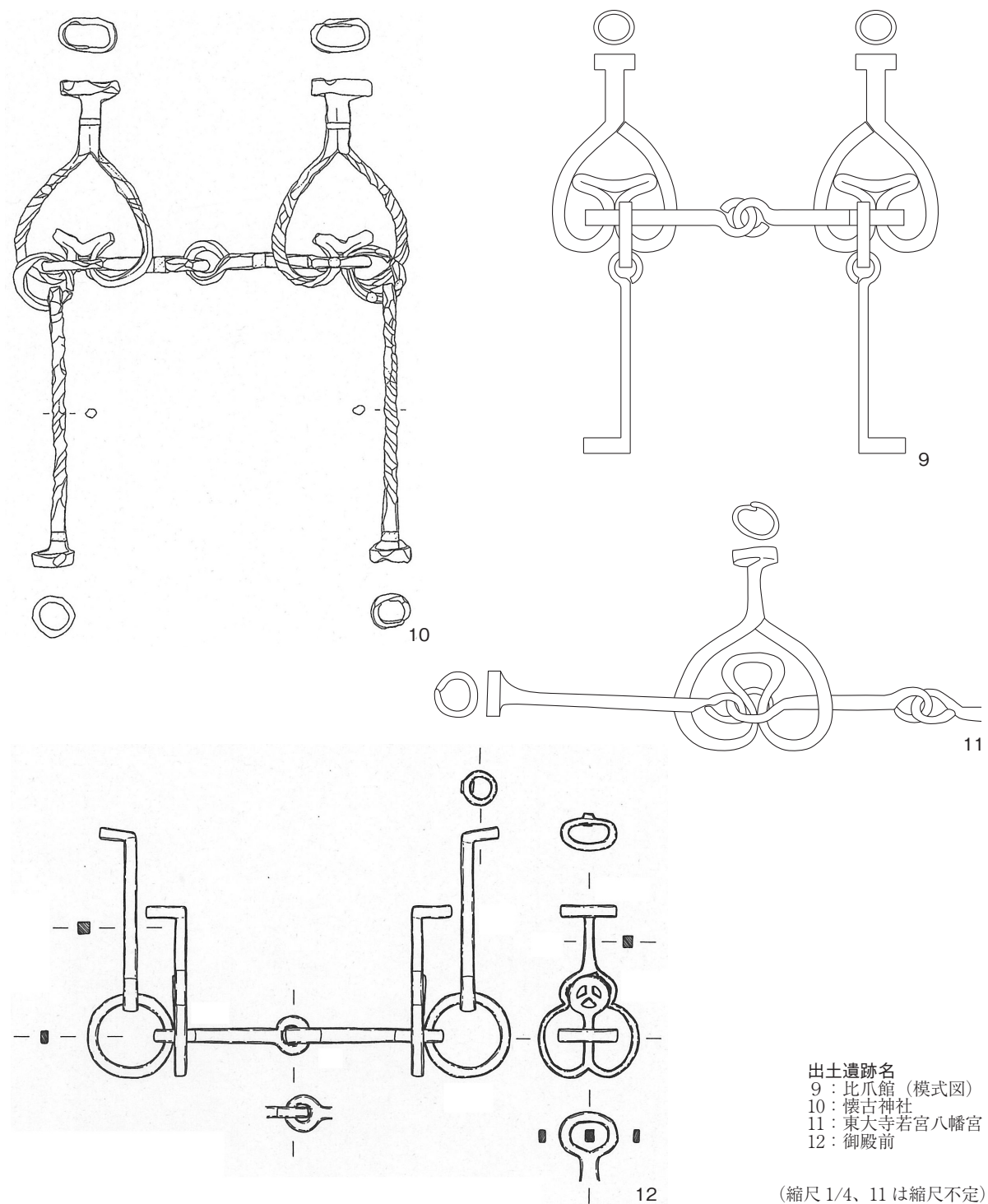
鈴木一有と津野仁の集成によると、杏葉轡は熊本県から青森県までで出土が確認されているが、点数は15点程度であり、轡全体の出土数からみると非常に少ない(鈴木1999・津野2012)。形状がわかる代表的な事例としては第5・6図に挙げたものがあるが、環状・棒状の鉄製品として報告されている破片資料のなかにも含まれている可能性はある。鈴木は片山寛明の系統分類をもとに2類に分類し(第6図下)、鏡板の下端部を蕨手状に巻き上げるものをA類、幅が広く扁平な板状で三葉形等の装飾が施されたものをB類とした。また、A類をさらに細分しており、鏡板が円環状で両端が蕨手状に巻き込まれるものをA1類、鏡板が逆ハート形となるものをA2類とした。なお、発掘出土品としてはA類がほとんどであり、B類は現在のところ東京都御殿前遺跡例(第6図12、以下第○図省略)のみである。A類の鏡の形態は、A1類からA2類へという変遷が考えられており、古いものは立聞と鏡が別作りであるが、新しくなると一連で作り出されるようになる(第6図下)。すなわち、円環形で別作りのものから逆ハート形で一連の作りのものへという流れが杏葉轡における変化の方向性であったと考えられる。

年代については出土数が少ないことから断定できない部分も多いが、遺構内で共伴する遺物や炭化物年代測定結果からA1類に該当する長野県松原遺跡例(2)は9世紀前半、A2類で別作りの奈良県平城京左京二条四坊二坪例(5)は12世紀後葉、A2類で一連の作りである岩手県柳之御所遺跡出土例(6)は12世紀第4四半期と考えられる。この他、御殿前遺跡例(12)や伝世品である長野県懐古神社所蔵品(10)は鎌倉時代(13世紀代)と考えられている。なお、鈴木一有は鏡の形態が円環形から逆ハート形に変化するの、立聞と鏡の製作方法の変化に加えてB類の成立と関係が深いと推定している(鈴木1999)。

続いて部品ごとに本資料と類例との比較を行っていく。まず銜であるが、残存しているものをみると青森県林ノ前遺跡例(4)を除いて蕨手状銜であり、連結数は二連である(註3)。林ノ前遺跡例は二連銜ではあるが二条線引手と同じ製作方法の銜であり、特殊な事例と考えられる。これを除けば本資料を含めていずれも蕨手状銜を二つ連結しており、杏葉轡ではこの方法が一般的であったと考え



第5図 同型式轡の諸例(1)



1：A1類（松原）、2：A2類最古相（平城京）、3：A2類古相（宮久保）、4：A2類新相（草戸千軒町）、5：B類（高津古文化会館藏品）

第6図 同型式轡の諸例（2）、杏葉轡分類図

られる。次に引手であるが、残存しているものをみると本資料及び神奈川県宮久保遺跡例（１）・松原遺跡例（２）・柳之御所遺跡例（６）・御殿前遺跡例（１２）は掬じり無し一本柄引手であるが、長野県懐古神社所蔵品（１０）は掬じり有り一本柄引手、林ノ前遺跡例（４）は掬じり無し二条線引手である。なお、現存資料ではないが『集古十種』に掲載されている「大和国東大寺若宮八幡宮蔵鞍並皆具図」の杏葉轡（１１）も掬じり無し一本柄引手である（註４）。引手壺はいずれもＬ字形に屈曲し、反対側の環は林ノ前遺跡例を除いて蕨手状である。以上のように、銜に比べてバリエーションは多いが、掬じり無し一本柄引手で、引手壺がＬ字形に屈曲し蕨手状環を持つものが一般的であったと考えられる。なお、棒状部の断面形は、掬じり無し一本柄引手は正方形又は長方形（２・９・１２）と板状（１・６）、掬じり有り一本柄引手は円形（１０）、二条線引手は正方形（３）である。

次に鏡板であるが、本資料は鏡の平面形が逆ハート形で立聞と鏡が一連で作り出されていることから鈴木分類のＡ２類に該当する。平面形は縦に長い逆ハート形であるが、立聞と鏡の境界の屈曲が明瞭であり、Ａ２類古相とされる宮久保遺跡例（１）と新相とされる広島県草戸千軒町遺跡出土例（８）との中間的な形態と捉えられる。鏡板の下部は蕨手状に巻き込まれるのではなく、鉄棒を曲げて三叉状に成形しており、このような立聞と鏡が一本の鉄棒からなり鏡の中央部を棒を曲げることで成形するＡ２類は、発掘出土品では本資料の他に御殿前遺跡例（１２）、伝世品では懐古神社所蔵品（１０）や東大寺若宮八幡宮所蔵品（１１）がある。また、Ｘ線写真が無い為推定にはなるが、鏡の平面形が本資料と類似する宮城県新田遺跡例（７）もこのタイプの可能性がある。なお、中央部の形状は三叉状（９）・「Ｍ」字状（１０）・「Ω」字状（１１）があり、鉄棒の端部が立聞の下端部に接するもの（９・１１）と立聞と一体化するもの（１０）がある。本資料の断面形は正方形に近いが、懐古神社所蔵品（１０）は掬じり有りの円形、東大寺若宮八幡宮所蔵品（１１）は同一資料と考えられる奈良県手向山神社所蔵品（日本馬具大鑑編集委員会１９９１、註４）をみると薄い板状であったと考えられる。なお、立聞はいずれもＬ字形屈曲立聞で、立聞壺の形状は本資料の他に宮久保遺跡例（１）・松原遺跡例（２）・懐古神社所蔵品（３）・平城京左京二条四坊二坪例（５）・東大寺若宮八幡宮所蔵品（１１）が円形、新田遺跡例（７）・草戸千軒町遺跡例（８）・懐古神社所蔵品（１０）・御殿前遺跡例（１２）が方形である。円形はＡ１・２類共にみられるが、方形はＡ２類のみであり新しい様相と考えられる。

連結方法についてみると、遊環を介して銜・引手・鏡板を連結する橋金具連結法が多く、本資料もそれに該当する。銜と鏡板が連結され、さらに鏡板の外側の銜先環に連結された遊環に引手が連結されるものが多いが、松原遺跡例（２）は鏡板の蕨手状部分に遊環が連結されている。東大寺若宮八幡宮所蔵品（１１）は遊環が無く銜と引手が直接連結される引手・銜共連法であるが、京都府高津古文化会館や東京国立博物館に所蔵されているＢ類の伝世品をみても橋金具連結法がほとんどであることから（日本馬具大鑑編集委員会１９９１）、杏葉轡ではこの方法が一般的であったと考えられる。

ここまで本資料及び類例について特徴をみてきた。最後に鏡板①を中心に本資料の年代的位置づけについてみていく。本資料のような形態・成形方法のものは、鎌倉時代の製品とされる伝世品に多い（１０・１１）。また、発掘出土品では１３世紀代と考えられる新田遺跡例（７）と類似しており、本資料も１３世紀代に属する可能性がある（註５）。ただし、鏡の平面形が１２世紀後葉と考えられる平城京左京二条四坊二坪例（５）と中世と考えられる草戸千軒町遺跡例（８）の中間的な様相であり、１３世紀以降の製品に多い方形の立聞壺ではないこと等を考慮すると、本資料は１２世紀後葉～１３世紀前葉頃に製作されたものと考えられる。本資料はSI-160の床面よりやや高い位置で出土しており、明確にこの堅穴建物に伴うと断定はできないが（第１図）、小片ではあるがかわらけも相伴していることから、「比爪館」が成立した時期に製作・使用された可能性もある。

おわりに

以上、観察結果に不十分な部分もあると思われるが比爪館遺跡出土馬具について検討を加えてきた。本稿の成果としては、①実測図の作成により一部の欠損を除き遺存状況が良好であり、全国的にも少ない杏葉轡の類例を追加することができた、②類例との比較を通じて古代末～中世初頭にかけて製作されたものであることを示すことができた、という2点を挙げておきたい。

最後に、本稿の作成にあたり実測図及び写真の掲載を許可して頂いた紫波町教育委員会と実見の機会を与えて頂いた岩館岳氏・羽柴直人氏に記して感謝の意を申し上げます。

註

1. 轡の分類及び各部名称については鈴木1999と津野2012に従って記載した。
2. 本資料は既に保存処理作業が行われた状態であり、各部の計測値は肉眼観察により明確に錆や薬品による膨れと判断できる部分を除いた数値である。その為、出土直後の状態とは数値が異なる可能性はあるが、参考値として挙げておく。
3. 宮久保遺跡例は輪違の部分が遊環で連結されていたと想定されているが（第5図1）、他の事例を見る限り二連銜とみなすのが妥当と考えられる。
4. 東大寺若宮八幡宮は現在の奈良県手向山八幡宮のことを指すと考えられ、『集古十種』掲載の杏葉轡は『日本馬具大鑑 第二巻』に掲載されている奈良手向山神社蔵の杏葉轡（図版577）と同一資料の可能性はある。
5. 新田遺跡例は中世陶器と共伴することから13世紀代と考えられている。実測図・写真が無い為詳細は不明であるが、新田遺跡を含む多賀城周辺の遺跡では12世紀代の国産陶器も一定量出土することからこちらに属する可能性もある。

参考文献

- 青森県教育委員会 2006 『林ノ前遺跡Ⅱ 遺物・自然科学分析編』青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
岩手県立博物館 2014 『比爪 ―もう一つの平泉―』岩手県立博物館テーマ展図録
2016 『前平泉文化関連遺跡調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第33冊
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『柳之御所跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集
風間春芳 1999 「長野県内の杏葉轡3例について」『長野県考古学会誌』第90号
片山寛明 1990 「和式轡の展開」『日本馬具大鑑 第三巻 中世』日本中央競馬会
神奈川県立埋蔵文化財センター 1990 『宮久保遺跡Ⅲ 本文編』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15
国書刊行会 1908 『集古十種 巻四』
紫波町教育委員会 2002 『比爪館 第11～18次発掘調査報告書』
2015 『比爪館 第31次・第32次発掘調査報告書』紫波町埋蔵文化財調査報告書2014
坂本美夫 1985 『馬具』ニュー・サイエンス社
鈴木一有 1999 「律令時代の轡の系譜」『下滝遺跡群2』財団法人浜松市文化財協会
多賀城市埋蔵文化財調査センター 1989 『新田遺跡』多賀城市文化財調査報告書第18集
滝瀬芳之 1994 「轡について」『光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集
津野 仁 2003 「奈良時代武器・武具生産への変化」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会シンポジウム資料
2012 「古代轡の変遷とその意義」『考古学雑誌』第96巻第3号 日本考古学会
東海古墳文化研究会 2006 『東海の馬具と飾大刀』
東京都北区教育委員会 1992 『御殿前遺跡Ⅲ』
長野県教育委員会 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書6 ―長野市内その4― 松原遺跡 古代・中世 図版編』
長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書53
奈良市教育委員会 1989 「平城京左京二条四坊二坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度』
日本馬具大鑑編集委員会 1991 『日本馬具大鑑 第二巻 古代下』
羽柴直人 2022 『もう一つの平泉 奥州藤原氏第二の都市・比爪』吉川弘文館
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ 北部地域南半部の調査』
村田 淳 2021 「岩手県出土の古代馬具集成」『紀要』第40号（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

図版出典

- 第1図 岩手県立博物館2014・紫波町教委2002から転載及び筆者作成
第2図 鈴木1999・東海古墳文化研究会2006から転載 第3図 筆者作成・撮影 第4図 羽柴直人氏撮影、筆者作成
第5図 青森県教委2006・岩手県埋文1995・風間1999・神奈川県埋文1990・多賀城市埋文1989・長野県教委2000
・奈良市教委1990・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1994から転載
第6図 風間1999・東京都北区教委1992から転載及び国書刊行会1908から再トレース、筆者作成